【解説】

歌舞伎の「京鹿の子娘道成寺」の脚本は沢山ある。唄や三味線にお いても舞台の脚本によって歌詞や曲風に工夫がなされるので、様々なバイリエーションが作られるのだ。

長唄の歌詞には和歌や漢詩が織り込んであるところがある。「山尽し」と云われる箇所にある、「有馬山」の箇所に織り込んだ和歌は次のものである。更に、青字の段には楓橋夜泊という漢詩の引用がある。挙げれば切りが無いが、歌舞伎の戯作者、長唄の作詞者には中々に知的センスがあったということでもあり、観劇の客もまた然りであろう。

有馬山　猪名の笹原　風吹けば　いで其よ人を　忘れやはする

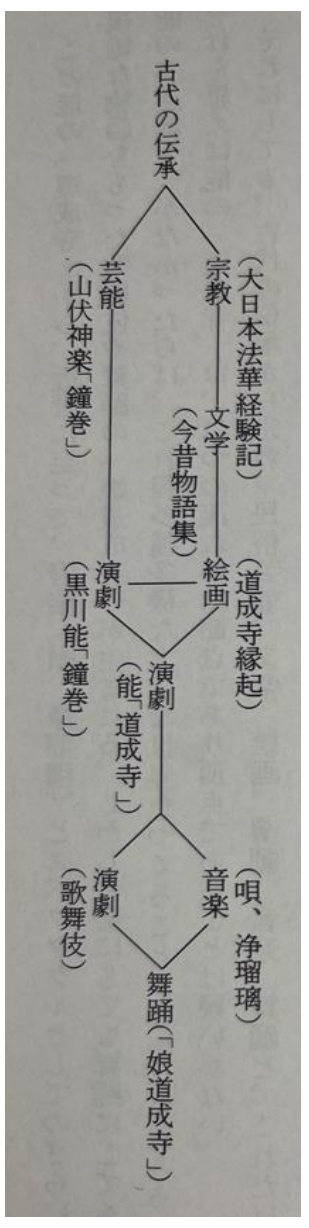
大貳三位（百人一首）

楓橋夜泊　張継（中唐期の詩人）

月落烏啼霜満天
江楓漁火対愁眠
姑蘇城外寒山寺
夜半鐘声到客船

「京鹿の子」という外題の冠は、京都風という一種の憧れを与えるキャッチコピーである。物語の底本は「能」の道成寺であるが、その淵源は古いと筆者は思う。女の情念と蛇との関係は、神話の世界まで遡る。大物主神は倭迹迹日百襲姫命と性的関係を結ぶが、大物主神は美しい蛇の化身であった。それを知った百襲姫が驚いて倒れて箸で陰部を突いて死ぬ。そして葬られたのが奈良の箸墓古墳と云う。別の神話に、須佐之男命が八岐大蛇を退治して奇稲田姫と結婚する物語がある。どちらも男女の性行為を蛇が仲介している。蛇は男根や女陰の象徴であろう。

これらを解説して述べるのは膨大な紙面を要するので、結論だけを述べれば、古代神話―山伏神楽「鐘巻」―黒川能「鐘巻」―「能」道成寺―歌舞伎「京鹿の子娘道成寺」という流れが残っているのである。次の図は渡辺保氏が「娘道成寺」（1986/3/25 駸々堂出版）で述べている系統図である。



以下に読者の参考として「能」の脚本をお示しする。

令和五年八月二十二日　大中臣正比呂　記

「道成寺」

シテ　白拍子・蛇体
ワキ　道成寺住僧
ワキツレ　従僧
アイ　能力

名宜　ワキ「これは紀州道成寺の住倡にて候。さてもこの寺に撞鐘久しく退転仕りて候ふを。それがし再興いたし鐘を鋳させて候。今日吉日にて候ふ程に。鐘を鐘楼に上げ同じく供養をなさばやと存じ候。いかに誰かある

アイ「お前に候

ワキ「鐘を鐘楼に上げてあるにて候。また存する子

狂言「さん候。鐘を鐘楼に上げ申して候

ワキ「同じく供養をなさうずるにて候。また存する子細の間　供養の庭へ女人禁制と相触れ候へ

狂言「心得申して候

（鐘楼固め）

次第　シテ「作りし罪みも消えぬべし。作りし罪みも消えぬべし。鐘の供養に参らん

「これは此国のかたはらに住む白拍子にて候。鐘の供養の御入り候ふ由申し道成寺と申す御寺に。鐘の御入り候ふ由申し候ふ程に。唯今参らばやと思ひ候

道行　「月は程なく入り汐の。月は程なく入りしほの。煙みちくる小松原。急ぐ心かまだ暮れぬ。日高の寺に着きにけり。日高の寺に着きにけり

「急ぎ候ふ程に。日高の寺に着きて候。やがて供養を拝まうずるにて候

アイ「ようよう供養の庭へ・・・・

シテ「これは此国の傍に住む白拍子にて候。鐘の供養にそと舞をまひ候ふべし。供養を拝ませて給はり候へ

アイ「さあらば某・・・・

シテ「あら嬉しや遅分舞をまひ候ふべし。

（物着～執心の目付け）

「嬉しやさらば舞はんとて。あれにまします宮人の。烏帽子を暫し仮に着て。既に拍子を進めけり

次第　「花の外には松ばかり。花の外には松ばかり。暮れそめて鐘や響くらん

（地取～乱拍子）

ワカ　「道成の卿。承り。始めて伽藍。橘の。道成興行の寺なればとて。道成寺とは。名づけたりや。

地謡「山寺のや

（急ノ舞）

ワカ　シテ「春の夕ぐれ。来てみれば。花ぞちりける花ぞ散ノル　地謡「入相の鐘に花ぞ散りける。花ぞちりける花ぞ散りける

シテ「さるほどにさるほどに。満汐ほどなく日高の寺の。寺々の鐘

地謡「月落ち鳥鳴いて霜雪天。人人眠ればよき隙ぞと。立舞ふ様に狙ひよりて。撞かんとせしが。思へば此鐘恨めしやとて。龍頭に手をかけ飛ぶとぞみえし。ひきかづきてぞ失せにける

（鐘入り）

アイ「・・・落ちてござる・・・

ワキ「言語道断。か様の儀を存じてこそ。固く女人禁制の由申して候に曲事にてあるぞ。さらば立ち越え見うずるにて候

「はや抜群に煮え入って候。

ワキ「いまだ知ろし召さざりけり。これにつき恐ろしき物語の候を語って聞かせ候べし。かう渡り候へ

ワキツレ「心得申し候

語リ　ワキ「むかし此国の傍らに。まなごの庄司と云ふ者ありしが。一人の息女を持つ。又其頃奥よりも熊野詣の先達のありしが。庄司が許を定宿とし。年々泊まりけるに。いたいけしたる土産などを持ちて来り。庄司息女に与えはかば。庄司娘を寵愛の余りに。やああの客僧こそ汝が妻よ夫よなんどと戯れけるを。をさな心に誠と思ひ年月を送る。又あるときかの客僧。庄司がもとに来りしに。彼の女申すよう。いつまでわれおばすて置き給ふぞ。今は奥へつれてお下りあれと申す。客僧大きに驚き。夜にまぎれ逃げ去り此寺に来り。かようかようの次第によりこれまで参りたり。まっぴら助けてくれよと申す。この寺の老若談合しおよそに隠してはあしかりなんと思い。その時の鐘楼を下ろしそのなかに隠す。また彼の女は。あますまじとてぼっかくる。をりふし日高川の水増りしかば。上下へと泳ぎありきしが一念の毒蛇となつて。日高川を易々と泳ぎ渡り此寺に来り。こゝかしこを尋ねありきしが。鐘のおりたるを不審に思い。龍頭を咥え。七まとひ纏ひ。尾にて叩けば。鐘はすなはち湯となつて山伏も即時に消えぬ。なんぼう恐ろしき物語にては候わぬか

ワキツレ「かようの御物語今こそ承りて候へ。我々の存じ候は。年月の行徳もかような時の為にてこそ候へ。ひと祈りお祈りあって。鐘をふたたび鐘楼に御あげあれかしと存じ候

ワキ「さあらば面々も力を添えて給わり候へ

ノット　ワキツレ「心得申し候

ワキ「水返って日高川原の。真砂の数は尽くるとも。行者の法力尽くべきかと

ワキツレ「みな一同に声をあげ

ワキ「東方に降三世明王

ワキツレ「南方に軍荼利夜叉明王

ワキ「西方に大威徳明王

ワキツレ「北方に金剛夜叉明王

ワキ「中央に大日大聖不動

ワキ、ワキツレ「動くか動かぬか索の。曩謨三曼陀曰羅赦。旋多摩訶遮那。娑婆多耶吽多羅干。聴我説者得大智慧。知我身者即身成仏と。今の蛇身を祈るうへは

ワキ「何の恨か有明の。撞鐘こそ

ノル　地謡「すはすは動くぞ祈れたゞ。すはすは動くぞ祈れたゞ。引けや手ん手に千手の陀羅尼。不動の慈教の偈。明王の火焔の。黒烟を立てゝぞ祈りける。祈り祈られつかねど此鐘ひゞきいで。引かねど此鐘躍るとぞ見えし。程なく鐘楼に引きあげたり。あれ見よ蛇体は。現れたり

（イノリ～鱗落し～柱巻き）

キリ　「謹請東方青龍清浄。謹請西方白体白龍謹請中央黄体黄龍一大三千大千世界の恒沙の龍王哀愍納受。哀愍じきんのみぎんなれば何処に大蛇のあるべきぞと。祈り祈られかつばと転ぶが。又起き上つて忽ちに。鐘に向つてつく息は猛火となつてその身を焼く。日高の川浪深淵に飛んでぞ入りにける。望足りぬと験者達はわが本坊にぞ帰りける我が本坊にぞ帰りける